



# 一泉

発行所  
〒921 金沢市泉野出町  
3丁目10-10  
金沢泉丘高等学校内  
一泉同窓会  
電話(0762)42-0211  
定価 1部 100円  
橋本清文堂

明治四十一年頃の中校歌は大場氏作歌、大西氏作曲の「雲に聳ゆる白山の、高き理想を心とし」で始まり、「北斗の光仰ぎつ、文の林に分け入りて」、「怒涛逆巻く越の海」、「学びの海に船出して」、「翳す徽章の桜花、文武の道を一途に」。即ち白山、北斗、北海の怒涛、桜花の校章などの示すように、昼は白山連峰を



笠森周護  
(二中十五回卒)



眺め、夜は北斗の閃光のもとに桜章帽を冠って知徳体の道に進出した頃を顧みて、現代の若人の奮起を希うのみである。

次に現在の校歌を繙けば、「医王の峰」、「加賀野に続く青い海」、「森深き山科の里に泉湧く」、「若人ら静けき念ひ世のために」、「若人ら文化の花を咲かせ行かむ」、など若人を達人の境に導くを念願するものであって今昔の感に堪えない。

金沢一中が本多の森から第一回卒業生を出したのは明治二十七年で、その後昭和二十三年三月学制改革によって泉丘高校と改名され、降って昭和三十年二月に初代会長英安吉氏のもとに一泉同窓会が結成され、同年十二月に第一号の一泉同窓会名簿が発刊されたのであります。即ち開学から現在まで約八十七年の光栄ある歴史を誇る泉丘高であり、一泉同窓会である。

冀わくば校長、一泉同窓会長、会員諸賢の協力によって、「一泉」が愈々隆盛に発展せむことを念願するものである。  
(金沢大学名誉教授)



「一泉」第三号によせて

同窓会の「タテ」のつながり



泉丘教頭 疋田伸勝

「一泉」に執筆を依頼され、正直なところ当惑している。文章を書くということはあまり得手でない私にとっては大変な苦痛なのであるが、お断りすることもできないので、ここでは、同窓会について感じたことを述べておきたい。

毎年十月、金沢で行なわれる一泉同窓会総会には、諸先輩はじめ、大勢の同窓生が参集され、盛会である。まことに慶ばしいことと思う。ただ、いささか気にかかるのは、若い人達の参加が少ないことである。「御年配の方々や、偉い人達が多数おられるので、圧倒されるし、肩身の狭い思いがする。十年たつてから出席しよう」という話を聞いたことがある。しかし、これは狭い見と見と見と見ではないだろうか。気軽に参加でき、懐しい顔ぶればかりであること望むのなら、同期の同窓会に出席

すればかなえられよう。総会は「一泉」の名にふさわしく、各期の同窓生が参加するものであって、そこで培われるタテのつながりこそが、同窓会の発展を促すのである。ヨコのつながりだけでは同窓会という組織は動かない。校舎改築も軌道にのつた今、いよいよ泉丘の新しい歴史が始まろうとしている。こういう時こそ、若い力が必要とされるのである。

新校舎竣工の暁には、同窓会も九十年の歴史を刻むことになる。壮大な伝統を誇る同窓会の絆をますます強固なものにするために今年度の総会には、若い人達が誘い合わせて多数出席されるようにお願いしたいものである。そして、諸先輩の方々や、旧師と大いに語り合ってほしいと思う。先輩、後輩が一体となって、一泉同窓会をより一層発展させて戴きたいと祈念するものである。

桑の畑で



川西弘晃 (一中三十三回卒)

中国は絹の国である。養蚕のために広く桑が栽培された。桑畑で桑を摘む婦人の艶姿を詠んだ詩は、中国

最古の詩集である詩経の中にも散見する。この桑畑は、時には男女逢引きの場となった。

云誰之思 ここに誰をか思ふや  
美孟姜矣 美しき孟姜ぞ  
期我乎桑中 我と桑中に期らんと  
要我乎上宮 我を上宮に要へ  
送我乎淇之上矣 我を淇の上まで送りぬ

詩経鄘風の「桑中」という詩の一部である。「私が」思っているのは誰か。それは美しい恙家の姉嬢。私と桑中で逢引きしようと、私を上宮(地名)で待ちうけ、私を淇の川のほとりへ送ってくれた」という意である。「当時は風紀が乱れ、人の妻妾をぬすみ、幽遠の処で逢引きした」ということが、この詩の小序に見えている。

また、唐の李白の「子夜呉歌」という詩には、「羅敷」という秦氏の婦人が桑を摘んでいると、その地方の太守が五頭立ての馬車でやって来て、羅敷を乗せて帰ろうとする。羅敷は「あなたも奥様のあるお方、私にもりっぱな夫がおります」と言つて拒み続けて

蚕飢妾欲去 蚕飢ゑて妾去らん  
五馬莫留連 五馬留連するなかれ

「家にいる蚕が飢えますから、早く



山茶花や

そこはかとなく

過ぐる日々

金森勝弥 (一中二十二回卒)

桑をやらねばなりません。私はもう帰ります。あなたもここに居続けられても仕方ありません」と言い、そのまま桑の籠を肩にして、さつさと家に帰ってしまった」という貞女羅敷の姿が巧みに描かれている。桑の畑が、積極的な逢引きや、脅迫に近い誘惑の舞台になったということは、中国の古代社会においては珍しいことではなかったと思われる。(石川大学)

# ある追跡調査

平石 英雄  
南 秀男

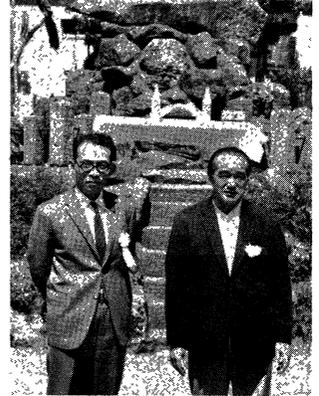
(二四四十一回卒)

「一泉」の同窓会員名簿を、前回発行から十年経ったので新しく発行しようと思うので手伝って欲しいと西多事務局長から頼まれたのは、確か昭和五十二年の秋だったと思えます。

手伝い出して判った事ですが、一中の卒業生の内、特に明治、大正年間に卒業された古い会員の方で消息不明の方が余りにも多い事にまず驚きました。

これは前から薄々気づいていた事ですが、前任の担当者が余り熱心でなかったのかも知れませんが、古い伝統のある一中の而も誠に立派な方々を調査も充分せずに、以前の名簿の書き写しで不詳として放置されている事を心から残念な事だと思いました。

(3) 「一泉」の同学の士としての絆をより強固にする手段、つまり会の目的とする会員相互の親睦と有形無形の協力を図り、会の発展を期する道は、唯一つ立派な会員名簿の完成にある事が私達のかねての持論でありました。



そして、その裏付けとなるのは、費用も嵩むけど不断に出来るだけの会員と消息の調査で接触し合う

事にあるわけで、単発的な総会や懇親会を幾ら派手にやっても要は基礎作りを怠った花火線香の行事に終る事が多く、決してより強固な会の発展には仲々結びつかないという事は、多くもない経験からも我々なりに答が出ていました。

それ以来私達は、自分の仕事の余暇を殆んど先輩会員の消息の追跡調査に費して参りました。昨春秋の同窓会各期役員会の席上でその成果の数字的な発表を致しましたが、ここではその調査の過程でのエピソードを二、三披露致します。

一、第二回卒 福田十太郎氏(死亡) この方は、一中の明治大正期に多い東京帝大卒の一人ですが、東大は何故か名簿が各学部共余り整備されておらず、この方面からの調査は不調でした。前回名簿で東京都中野区

が住所になっているので、中野区役所に調査を頼んだ処、大変親切な方が一生懸命調べて下さった処、幸い古い資料が焼け残っていて、隣の出身である事が判り、福田家へ養子に行かれた方ですが旧姓も福田姓でその養母という方の名前が「福田福田」という珍姓でした。無論明治以前に生れた方ですが一体どうおよみするんでしょうか。

二、第七回卒 陸田 駿氏(死亡) この方は長い間名簿上では不詳でどこまで遡っても手がかりがつかめず、大正四年の名簿で初めて「大阪で実業」と書いてありますが、名前が駿と云う字になっています。大阪の古い住所を色々たぐったり、割合珍らしい姓なので全国の電話番号簿で陸田姓を名乗る人に問合せのハガキを出しましたが不発。主にこの姓は広島に多い様です。最終的には、厚生省の人口動態の資料を集めている部門で、九十九才以上の現存の方の名簿の中に見当らない事が判り、同氏は一〇〇才を超えていられるので遂に死亡としました。

この様な迂余曲折の調査は今迄無数にありますが、もし再度書く機会があったら又書いてみたいですね。まあSF小説もどきの様ですから。

## さらば学舎

在東京 野本 正作  
(昭和二十九年卒)

母校泉丘校舎が今般老朽化による改築との話を聞き、かつての三ヶ年の学舎に限りない愛着を覚えた一人です。

小さい時からあの校舎に憧れていた私には、金沢から離れて生活しているせいか人一倍懐かしいものがあります。その想いがこの詩を作らせた。詩には全く素人ですが、私の気持をその儘つづつてみました。

## さらば学舎

作詩・野本正作

- 一、風雪なんぞ幾星霜 泉野原の原頭に  
遙けく望む白山の 志の如く聳え立つ  
誇りて高き学舎は 一泉健児が故郷や
- 二、我等が青春を語る時 君の姿が其処にある  
我等が友を語る時 君の姿が其処にある  
たとえ容貌の代るともいかで忘ることあらん
- 三、形あるものは崩れゆく はかなき運命嘆けども  
見よ育くめる益荒男が雄々しくあれと指し示す  
理想の空に舞い立ちて 羽擲く様を魂を
- 四、さらば我等が学舎よ さらば我等が故郷よ  
残せし君が礎石に 続ける心伝い来て  
新しき芽を吹き出し 弥栄て華や咲すらん

# 同窓の随想

## 手紙のすゝめ

北村魚泡洞(三郎)  
(一 中三十一回卒)

親友の岡本啓とは小学校が同窓で、大正八年に金沢一中へいっしょに入学した竹馬の友である。彼は金沢市内でもよくはやる小児科医院の長男だが、私は家を転々とかわる貧乏人のせがれだったにもかかわらず、ウマがあつて親友のつきあいをしていた。彼は三年の時首席だった。四年の時、青山学院へ転じ一高、東大医学部へ進んだ。この時代に彼と毎日のように文通していた。おもに思想問題について論じあつた。私は変遷の多い生活を余儀なくされ、何もかも四散したが、彼の手紙だけは百通

ほどでもとに残っている。時々ひっぱり出して読んでいるが、二人の青春の流れが実によくうかがえてほんとうになつかしい。私にとつてこの一たばの手紙は宝である。

最近では電話のなが話ですべてまにあつてゐるから、手紙を書く青年がすくなくなつたと聞く。しかし私はそんな青年たちに日記(大学ノートで)をつけて、なんでも思つてゐることを書くくせをつけ、友人にはせつせと手紙を書くことをすゝめる。そうすることによつてしぜんと物を書くくせができる。物が書けるといふことは一生の徳である。郷土史の研究にしても記録にのこしておかねば後世を益することにはならない。私は若い時から物を書く習慣がついたおかげで、今でも毎日雑文を書く。だから七十四歳になつても退屈するということがない。

(石川郷土史学会々員)



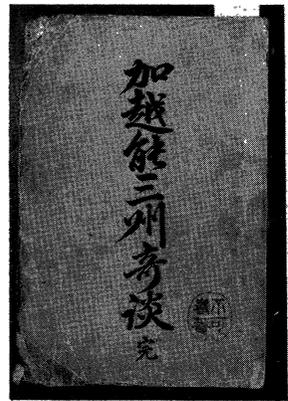
山森青硯  
(一 中三十三回卒)

## 高尾の陰火

堀麦水の「加越能三州奇談」と云

う本に

高尾山(高尾山とも)富樫政親が城跡、ふしぎの鬼燐ありて、俗に



坊主火といふ。獵人古狸の大入道となりしを得て、後此火なしとの咄人口にありと雖、今も猶此辺り、海辺迄燐火飛ぶ事絶えず。其何たるを知るることなし。

とある。又「加賀志徴下編」二五五頁「高尾の陰火」の項に

毎夜、戌之上刻の比より出で、遙か卯辰の方に当りたる茶磨山の後へ落る也。暁方又現れて高尾山へ帰る也。其道筋を行く事空を飛ず、山の高低に従つて、火も上下して往来する也。高尾山にて見る時は間近く行ゆえに、追かけて見れば消て見へず。しばらく先へ行て又現るるなり。故に間近く火の形を見たるものは此無きとて、世には是を坊主火と号す。

とある。古来沢山の人が此の坊主火を目撃している。富田景周の「三州志」には、「富樫政親の亡魂怨結して化する者か」と述べているが、森田良見氏は是を反駁し

長享二年五月廿六日に、鞍嶽より光物出で西海の波に沈み、其迹鳴動する事明る二十七日の朝迄やまざりけり。是今云う坊主火ならば、富樫滅亡前より在りし陰火にして、政親存命中よりの事なり。

と述べている。此の高尾山坊主火と云うのは、金沢郊外地黄煎町から高尾尾に起る現象で、古老の口からも屢々語り伝えらるる話である。筆者研究室は泉丘図書館書庫、高尾山とは目と鼻の間直面している。

昭和二十二年の暮方であつたらうか、昭和二十三年の春頃であつたらうか、未だ学校に当直の在つた頃、(先生一人、小使一人)冬吹雪のあつた日であつた。大きな雪のいかたまりに似た、一つの大きい火の玉が、泉丘校舎めがけて接近して来た。漸て窓硝子に当つて一大音響と共に碎けた。垣田生知先生(小松明峰高校長)は是を目撃された。又給仕某氏は腰を抜かして、其場に倒れ伏したと云う。

以上は垣田先生聞き書きであるが、矢田四如軒著異本「吉野拾景遊覧図記」にも地黄煎町より高尾に至る陰火一件が述べられてある。

前記火の玉の当つて碎けた窓は、泉丘校正面玄関、現在学務員仮室の向つて左窓であつたと云う。

(石川郷土史学会員)

# 学歴主義



浦 茂  
(一、中三十四回卒)

の封建時代が悪いので孔孟老の格言が良いものは何千年たっても良い。温故知新や徳不孤は今も生きています。中国の大人振りにはっと胸を打たれた。  
(元航空幕僚長)

## 金石往還とモックリ



大 森 玄 衆  
(一、中三十五回卒)

の封建時代が悪いので孔孟老の格言が良いものは何千年たっても良い。温故知新や徳不孤は今も生きています。中国の大人振りにはっと胸を打たれた。  
(元航空幕僚長)

一中に入学した一年生の夏は、七月の終りの休暇に入るなりから二週間、金石海浜での水泳訓練が必修課目になっていた。クロールやバツクストロークなどの競泳がもてはやされたのは大分あとのことで、その当時の泳法はもっぱら観海流で五十町から三里半、五里と遠泳が主体となっていた。

旗を立て太鼓をのせた小船を先頭に遠くの沖合から「ドン、ドン」と太鼓の音が聞え、一列に並んだ生徒達の頭がケシ粒のように見えかくれる日もあった。

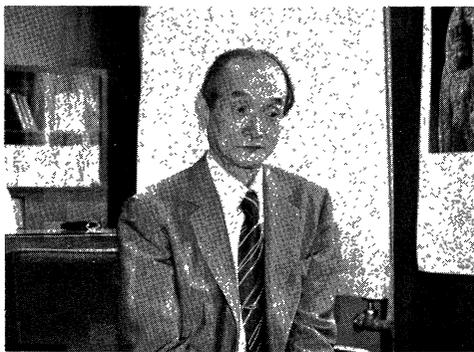
海浜は今と違って大変広いものだった。桜章のマークの入ったテントから波打ち際までは五十メートルもあつたらうか、焼けた砂の上を裸足で海まで走るのに一苦労したものだ。

(五智大乘院住職)

## 記念祭に先輩

### 杉森久英氏を迎えて

昨秋九月二十二日から三日間、泉丘高校にて第32回創立記念祭が催された。記念祭のテーマを「新時代への序章」とし記念祭の各種行事や団体展に取り入れて開催された。その第一日の記念式典の記念講演会に杉森久英氏(一中36回卒)を招き、講堂をうめつくした泉丘高校生を前にして一時間余の講演会が催された。往時の一中生の気概を中心としての学校生活を主題としての講演に若い後輩に大きな感銘を与えた。



(5)

昨秋アフリカのケニヤで英人教授とサファリーカーで大草原の動物を見に行ったとき学校の話が出た。よくいわれる人物評価の一つの尺度として、日本のどこの学校を出たか、アメリカのあなたには何ができるか、英国のどういう教養を身につけているか、フランスのどんな資格を持っているか、ドイツの何を創造できるかというように各国異っている。教授曰く、地球は狭くなり人物評価もWorld wide spaceを問う時代になった。南太平洋の新興独立国やアメリカの発展途上国を訪ねて、国際化の波にもまれながら次代の教育に力を注いでいる実体に触れて、日本の学歴主義は時代遅れの感を深くした。

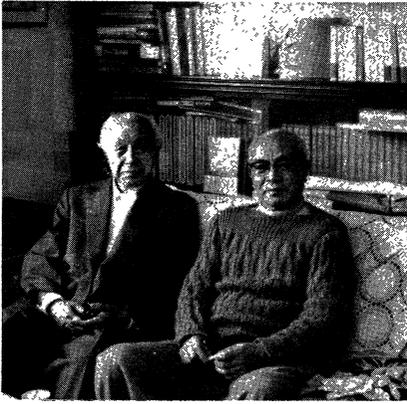
昨年八月、日中友好書道使節団の副団長で書家二三人、新聞社など六人と北京・西安・上海・蘇州で古代文化の研修と書道の交流を行った。私は一中時代にも習った孔孟老子から格言名句を数十準備して行ったが、孔孟老が批判の対象になっていると聞いてはたと困った。ところが政府の文物局や美術協会の代表は、当時

(6) 故郷金沢

斎藤季夫  
(一中三十六回卒)

今年の冬は、何十年振りの「豪雪だ」と聞いて、さっそく故里の友に電話したところ「新聞やテレビで報道しているものなんて、ほんの序の口だよ」と言い、僕が「東京はいい天気だよ」と言うと「畜生！」という声がピーンと受話器にはね返って来た。

もう六十年にもなる小学生の頃、三社から長土堀小学校に通っていた冬、やはりひどい大雪に見舞われたことを思い出した。現在では、跡かたもなく変貌してしまった長土堀の



「商店街」であるが、狭いその家並は完全に雪に埋まり、マントを被ったわれわれ小学生たちは眼の高さになつた石置き板葺きの庇の長い二階の兩戸を左右に見ながら足を滑らしすべらし登校を急いだ。その雪の上をヨタヨタ歩いてくる櫓をよけるのが精いっぱいだったものだ。

それから後、それほどひどい大雪の記憶はなかったが、冬が来るたびに、本多町にあつた「一中」へ、それから後広坂通りの四高へ通う長町の用水に沿う道筋がいつも雪でぬかるみ、冷たく重く足にまつわつたことが、「金沢」を思うにつけ先ず頭に浮んでくる。

その金沢を離れて五十年になるが、五年前の二月、たまたま仕事で当地に赴いた折、うかつにも雪のことが念頭になつた。ところが、わざわざ駅頭に迎えに来てくれた旧友M君が久闊を叙したあと、手にした紙包みを徐ろに紐といて目新しいゴム長をとりだし、僕に手渡ししてくれた。

「おまえ、金沢に来たら、これが無いと歩けぬぞ」と言いつつ……。思わず、目頭がジーンとなつた。「友とは有難いものだ。」自分の不用意を愧じるよりも、一瞬「これが、金沢なんだ」とつくづく思い知らされた。

それにしても、旧きつなりの故

里と、勉学を共にした旧きよき友だちとの交わりは、いつ思ひだしても楽しい。東京及びその周辺にも三十人近い同窓がまだ「健在」である。年に二回の集りを、ここ数年実現しているが、二十人近くが必ず集つてくる。三年前に「卒業五十年」を一年繰りあげ金沢で催したとき誰れも

かれも半世紀前の面影はすでになかつたが、ものの数秒で鮮やかに昔が甦つてきた。今年はこの三月二十九、三十日、土屋博靖君の肝入りで愛知県「明治村」で大会を開くがすでに二十数人が集まることになっている。ただ残念ながら、折角出席を約束しながら、一人、二人と取消しのあることだ。

あと数日に迫る「出逢い」を夢見ながら、終つたら、その足で金沢へ往く心算の僕には、桜はまだ早いだろうが、心はずむ今日この頃である。(文一総合出版顧問)

◎写真左方は兄玄彦氏(一中出身)

関東三七会新年会感想

普神益雄  
(一中三十七回卒)



悠久の流れの中にあつて……嘗て私達が若躍として文武の道にいそしんだ金沢一中生活時代こそ、その歴史と伝統精神を若き青春の胸奥に刻み込んだ懐かしい、そうしてすばらしい貴重な歴史の一頁ではなかつたらうか。

その若き日常に光輝ある歴史と赫々たる伝統！更に肅然たる校風にな常に自信と誇りを感じつ、颯爽たる桜章の黒帽で通学せし懐しい五年間を偲びつ、今は唯感慨無量……

或は鬱蒼たる本多の森に抱かれた古色蒼然たる校舎……無限の奥ゆかしさを感じたありし日の母校を偲びつ、中村幹事以下十一名の同期の老友は今涙をた、えて静かに、それらありし日の懐しい思い出を、しんとしたもの思いにふけています。何とすばらしいことだろう、何と美しいことだろう。

こうした機会を経る毎に益々同期のよしみは深さを増し、ゆかしさを加えてゆくことです。このふれあいに支えられて同期の各位は悔いのない天寿を全うされることでしょう。人生こゝに生甲斐ありと私は心の奥から叫び続けたい。

# ふるさと

加藤 俊 男  
(一中三十八回卒)



地球儀を見る。「あつた、あつた」  
小さく細長く赤い色の日本列島、斯  
んな小さな国にハッキリした春夏秋冬  
の四季がある。而も冬には日本海  
側に雪が降るが太平洋側は殆んど晴  
天で雪が降らない。勿論山脈のせい  
だろうが不思議な気もする。

私は大正二年金沢市小橋町に生れ  
た。浅ノ川畔で当時は川もキレイで  
鮎を始め種々の小魚が居て夏等一日  
中、川で遊んでいた。其のせいか今で  
も魚取りが好きだ。戦争中足掛け四  
年赤道直下南洋群島の守備に行った  
が、四季があると云う事を殆んど感  
じない。

戦後二年ばかり大阪所長として郷  
里を離れたが其の他は金沢に暮して

いる。三八豪雪や五六豪雪は全く嫌  
になるが、少量の降雪は美味しい魚  
等があるので待ち遠しい程だ。特に  
鍋物の好きな私は退屈しない。兼六  
公園や尾山神社等四季を通じてそれ  
ぞれ趣きが豊かで目に心に楽しませ  
てくれる。亦食べ物も四季それぞれ  
に旬を感じ生きている喜びがしみじ  
み味える本当に良い郷土だと思つて  
いる。年が経るに従つて奥深く執着  
を感じる。先日金沢に尾山三十三ヶ  
寺のあることを聞いた。一度ゆつ々  
り訪ねたいと思つている。大体の調  
べだが

- 宝幢寺(幸町) 雨宝院(千日町)
- 長谷院(本多町) 少林寺(野町)
- 瑞光寺(本多町) 西養寺(東山町)
- 棟岳寺(石引町) 景勝寺(長江町)
- 竜国寺(東山町) 瑞雲寺(宝町)
- 法然寺(菊川町) 永久寺(東山町)
- 妙慶寺(野町) 宝泉寺(東山町)
- 崇禅寺(瓢箪町) 寿経寺(東山町)
- 成学寺(野町) 観音院(東山町)
- 祇陀寺(十一屋) 源法院(尾張町)
- 極楽寺(寺町) 小林寺(野町)
- 雲龍寺(東兼六) 久昌寺(堀川町)
- 安住寺(旧寺町) 高源院(宝町)
- 伏見寺(寺町) 宝集寺(寺町)
- 西方寺(寺町) 猷珠寺(宝町)
- 千手院(野町) 岩倉寺(石引町)
- 波着寺(石引町)

(大日サイジング会長)

# 三本の榎と松の木



山瀬 芳 男  
(一中三十九回卒)

「本多の森に一本咲ける桜こそ  
われらが母校のしるし……」兼六園  
下広坂の一角に立ち懐しい本多町の  
通りを眺めると、道幅が三倍以上に  
拡張され近代建造物が群居し、面目  
一新した姿は往時を知る者にとつて  
はおどろくべき変化である。然しな  
がら、何となく他都市に感ずること  
の出来ないおっとりとした面影を含  
んだ風情が残っている。それは本多  
町の通りの真中に今も尚残っている  
三本の榎と松の木の姿である。これ  
即ち往時の一中健児の学び舎、金沢  
第一中学校の唯一のおもかげである。  
学期末になると成績順位が額入りで  
教官室の窓の下に掲示された。一喜  
一憂こもごもの若き青春の姿をこの  
木は静かに眺めていた。この木はた  
しか校门を入れて教官室横の土堀の  
際にあつた木だと思つた。

旧一中の校门は現在の自衛隊地方  
連絡部(検察庁本多町分庁)のここ  
ろ、校舍跡は社会福祉会館、社会教  
育センター等に一変し、本多邸跡は

北陸放送会館となつてゐる。またタ  
クシー一台しか通れなかつた本多町  
の道路を隔てて運動場があつた。去  
る日観光会館へ行きました折、こゝ  
が元ガス、水道局の跡であるとの話  
をして居られるのを聞いたが「元金  
沢一中の運動場の跡」の言葉の無か  
つたのは残念で淋しい気がした。

私達は昭和七年金沢一中を卒業し  
た。この同窓を名づけて七桜会とい  
う。卒業して今年足掛五十年を迎  
える。「ああなんと五十年たったの  
か」感無量のものがある。光陰矢の  
如し。

来る六月十四日(百万石まつり)  
に同期生大会を開き、全国各地に活  
躍する学友数十名が懐かしいこの三  
本の榎と松の木の下に参集し、本多  
の森を偲ぶことにしている。そして  
かつての桜章健児の青春を蘇えらせ  
後輩泉丘高校を訪れ厳霜碑にぬかづ  
き、いまは亡き学友七〇余名の冥福  
を心から祈り、併せて更に若き青春  
に戻り、余世再出発の門出にしたい  
と考へている。  
同窓会も後輩泉丘と共に名称も一  
泉同窓会と称し一丸となつて団結し  
ている。  
三本の榎と松の木よ、どうか一中、  
泉丘健児の活躍を末永く見守つて欲  
しいと思うのは、唯若き日へのノス  
タルジアのみであらうか。

# 今年の雑感



本 多 政 一  
(一四四四回卒)

今年は何々の四四桜会も卒業後四十四年目とてこれを記念して四四ブラス四四で八八年記念全国大会が久方ぶりで当地で行なわれます。大変に楽しみな事です。又初夏の城下町金沢を舞台に、華やかに繰り広げられる百万石まつりは六月十三日より十五日までの三日間で、ことしは三十回に当たりますので従来の行事のほかに県の代表的な太鼓などを集めた『石川県のまつり』を新たに企画され、同まつりに花を添える市民参加から県民参加へと飛躍される年になります。私の家と関係が深い旧加賀藩主前田家の御当主を御招きしての加賀八家旧誼会も、今年には五周年を記念して新たに前田家御三家を加えられての百万石前夜の会も行なわれます。私が只今会長をして居ります北信越の博物館協議会の大会が当番県にあたりますので盛大に当県で行ないます。又本館に於いても六月十三日より二十六日まで、北陸地方では初めての前田利常と小堀遠州展が開かれ遠州流の全国茶会の大会が当地で開催されます。三代前田利常公と小堀遠州とにつきまして少々ふれ

させて頂きます。前田利常公が加賀藩文化史上に果されました事蹟は、一言で申せば、宮廷文化の導入というものでありましょう。そして、このことが後の加賀文化の方向づけをなしたと言っても過言ではありません。勿論、利常公が、武家でありながら、公卿的な世界を求められた背景には、寛永期の幕藩関係が影響していたことは申すまでもありませんが、このような傾向を更に洗練し、高められた利常公にとりまして、小堀遠州の指導と助言はなくてはならぬものであったと思われれます。小堀遠州は利常公より十四歳年長で、幕府の作事奉行として建築、作庭に非凡な腕をふるう一方、茶道に平安王朝風の書、和歌、禅を加味し、日本的な伝統文化の上に「綺麗さび」と評される茶道芸術を完成されました。彼の王朝文化への憧憬を思えば、利常公と遠州との結びつきは必然と言えます。遠州と利常公との書簡(石川県美術館発行「前田利常展」図録による)を見ますと、茶道の作法に關してのみならず、近況や鑑定についてもふれられており、興味が尽きません。又利常公の収集された茶器の箱書には、遠州の筆になるものが大変に多いのだそうです。加能郷土辞彙に見える小堀新十郎(遠州の婿)を利常公が二千石の高禄で召出して

いることも、遠州と利常公とのつながりが単に茶道においてのみではなかったことを示しているようです。(藩老本多藏品館々長)

## 私と子供

宮 田 欣 一  
(泉丘十回卒)

マレーシア赴任期間は一九七七年二月二日から一九八〇年三月二日までの約三年間であった。外国生活に於ける不安の最大のもの私の場合も同様、子供の教育に關してであった。しかし、幸いな事に、先に赴任していた上司の御子息が、小学二年から現地の学校へ入学しており、その二年間の経験の全てを前知識として出向いた為、それ程の心配をしただ由でもない。又、日本の現学校教育の内容を知り、マレーシアのそれと比べ、それが良いの悪いのと批判検討した由でもない。とは言え、いざ我身にさしませれば、学校教育が子供の将来に与える影響はやはり大きいのだと観念的に、本能的にも感じ入らざるを得なかった。

マレーシアの日本人学校は、主都クアラルンプルと北部中心都市イポのみにしかなく、私の赴任先ジョホール州パトパハではこの恩恵には浴さない。

中国系小学校では、先ず字を覚えること、書けることが教育の第一歩でどんな難しい字も書けなくては話にもならない。科学、社会といえども、始めは字の勉強である。子供のどのノートを見ても練習をした漢字で埋まっている。新中国の新字でないので、私はある程度意味が分かる。長男の場合、学校の授業はマンダリン、休憩では友人達と福建語、家では日本語、私の知人がくれば、一般に英語と少なくとも四ヶ国語を使い分けていた。長女は幼稚園で英語又は福建で、家では日本語、福建、潮州、マレーやインドの友達とはもっぱら英語であった。語の不自由さになくなったのが長男で一年程たつてからで、この頃から内容に入っていたのであろうか、学校の成績も伸び始めた。

三年間慣れた学校を後に、日本に帰国、小学四年に入学した長男、又一年生に入学した長女、これからどう変わるかが、私達夫婦の一番の関心事であり、マレーシアへ赴任した時以上の心配事である。(日本硬質陶器)

# 本部・支部だより

## 五十五年度一泉同窓会総会開く

秋晴れの十月十五日一泉同窓会定期総会を開催、恒例により母校々庭の厳霜碑前に於いて宮会長、学校側から大高校長と共に同窓会員が集り本校出身の物故者の慰霊祭を執行した。司祭には石浦神社の長谷宮司があたり、長らく同窓会の世話をしてきた四井謙次氏ら物故者に黙禱を捧げてめでい福を祈った。



このあと午後六時より金沢ニューランドホテルに会場を移し、総会を催した。

宮太郎会長の挨拶につづき大高校長から「ここの創立記念祭には杉森久英氏（36回卒）をお招きして講演を行った」等の学校の近況を報告し、「母校改築の状況に付き来る十月二十九日にはその起工式も予定され、四年計画の三十一億円の計画で完成後は五階建の県下高校では最大の規模の校舎となり、様式も一中、泉丘高の歴史と伝統を表象する型式をとり入れ、画一的な学校建築を避けた設計である」など校舎改築の報告があった。



西多事務局長から「来る五十八年の創立九十周年を迎えるに当り、目

下その資料の整備にあたって「この報告があり、懇親会に移った。尚、旧師の宮沢外与治氏から去る十月九日から開かれた絵の同窓会第八回桜美展に対する同窓会員の協力に謝意を述べ、今後の後援方を懇請された。乾盃の音頭は平松博富内科薬科大学長（34期）がとり、宴会は賑やかに校歌、応援歌の他、飛び入り出演もあり、盛んな総会風景の裡に散会した。

## 東海支部だより

昨年は雨の多い年であった。うらかな秋晴れの頃といった日は極めて少なく、毎日雨の日が続きます。

「今日も名古屋は雨だった」そんな九月二十七日五時東海支部総会が開かれた。本部より小川副会長も出席され、母校の近況のお話しに花を咲かせ、たのしい一日を過ごし、来年を約し乍ら散会したのが八時。

当日の出席者は次の通り。

- 小川忠男（本部より）、前田秀之、湯谷外喜男、佐久間文雄、越田章二、新家 厚、越村吉郎、橋本勇次、今井國男、沖野永保、伊佐 務、横山一雄、松原正一、宮島 宏、青木八重子、加藤操子、高木祝子、尾田榮子、篠原 博、仕道悟志、魚住隆彰



尚、会員諸兄の近況を御報告し、一泉会の発展隆盛を祝って筆を擱く

卒業年次 氏名 近 況

大正9年 高橋貞一 歩行困難の様子

大正10年 米原佐市 腰痛にて病床にあり

大正10年 中田義雄 夜の会合には体力的に自信がない

大正12年 角永 清 企 上

大正13年 山科清栄 奥様御病氣の様子

（東海一泉同窓会々長 前田秀之）

以上

### 関西一泉同窓会顛末記

吾々幹事の悩みはどうしたら多くの同窓生を集めるか、どうしたら出席者に喜んで貰えるか等であった。

それは今後又行われるであろう総会に影響する事であるので実の所非常に心配したわけですが、幸にも長岡寛厚氏、浅井悦郎氏、元地健氏、岡谷雄二氏、池田成夫氏等の智者のお蔭をもって十一月二十八日に会員一〇二名、来賓四名のご出席を得て、第一回の総会になりました。

当日は態々金沢より大高校長、竹田、小川両副会長にお越し頂き、又旧師の後藤重郎先生が見えられて錦上華をそえて頂きました事を大変感謝しています。



出席者のうち女性十五名、学生七名は、と角一寸固くなり勝ちなこの種の会合に華やかさと、若さをファンタジに盛り込んでくれてまことに結構でした。

司会は泉13期卒の中野俊彦氏にお願いして総会の宴がはじまりました。因みに中野氏は同期卒の元地弁護士に半ば脅迫されて、引き受けざるを得なかったらしいが、それにしては、まことに堂々たる名司会振りを発揮して下さって感謝しています。

竹田副会長、小川副会長、大高校長の御挨拶に続いて、小川氏の音頭による三々七拍子の全員拍手、林屋清三郎氏(36期)の音頭による乾盃が終った後は、ガブ／＼、チビ／＼ワイ／＼と二時間半の宴が続く。校歌、応援歌、山中節等々、奇声蛮声美声入りみだれてまことに、賑やかな事でした。

後日、私の手許に届いた女性からの礼状に、一中卒の方々の立派なものには驚きました。あたかもキラ星の如く大勢な云々、と言う文面を見て、総会を開いて良かったと喜んでみたり、くすぐったい思いをして見たりしたが、さてよ、之は一中卒の面々の頭の状態を皮肉っているのではなにか、光頭あり、白髪あり、まさにキラ星であると考えるに至って、ガク然とした次第です。

吾々幹事としては、十何年振りかで開いた同窓会にしては、充分満足出来たとはい切れない迄も、正直言って愁眉を開いたと言うのが今の実感です。

空白だった関西一泉同窓会の会長、副会長に左記の諸氏が選任されました事を御報告して、駄文を終わります。五五年十二月記 高岡(44期卒) 会長 八十島健二氏(竹中工務店専務取締役41期)

副会長 森澤 正夫氏(大阪機工(株)取締役社長47期)  
副会長 織田 潔氏(㈱デサント取締役社長長2期)

### 関東一泉同窓会が盛大に

東京を中心に関東在住の会員にて

結成の関東一泉同窓会が十一月七日午後六時から東京・明治神宮外苑の日本青年館で秋の総会を開催した。

本部同窓会より宮太郎会長、大高彰八校長、西多事務局長が加わり、旧金沢一中、泉丘高校卒の会員二百余名が一堂に集った。

北山雅義氏(55期)の司会で開会。鏑木政岐会長がまず開会の挨拶、引き続き宮会長、大高校長より校舎改築の工事概況の報告があり「総工費

三十数億円、県立高校では初めての五階建て、エレベーター付きの校舎で現在の倍以上の規模となる。五十八年度の90周年までに完成したい。旧校舎の思い出が皆様により、今の内に母校を訪門されるように」と母校の近況報告があった。



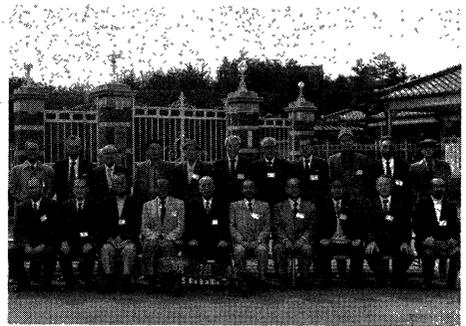
又、西多事務局長より母校同窓会の最近の活動状況の報告があった。これより役員改選に移り、瓜生順良氏を副会長に承認、瓜生新副会長の音頭にて乾盃、懇親会に移った。当日、多忙な日程の中を参加した坂本代議士のスピーチ、華やかに着飾った女性会員を混じえての母校校歌、応援団歌が次から次へと飛び出し、宴席は賑ったが八時すぎ再会を約して散会した。

# 同窓の集い

## 金沢一中三十六期生の集い

### 「明治村」に遊ぶ

昨年10月湯河原温泉（神奈川県）の集りでの申合せで、3月29・30日にわたり本年度春の全国大会を愛知県犬山市「明治村」近傍の入鹿池畔「入鹿荘」で開催。集まる「古稀」の群れ、頭初26名のところ直前体調悪のゆえ脱落者若干、結局22名が犬山駅頭に参集。「明治村」所長土屋博靖君の手厚いもてなしの裡、第一夜はまず安藤鶴夫作、五所平之助監督、竹田人形座演出の「明治村はるあき」（二巻）という明治晩期の東京下町情緒を描く操り人形劇画を各自感慨を籠めつつ観賞、終って一中時代の懐旧談を肴に美酒四升、ビール、ウイスキーを満喫、11時過ぎ就寝。翌朝8時半出発、明治村正門前で記念撮影後、土屋君の案内で村内五十五棟の明治を代表する遺構を見学、とりわけ立ち入り禁止の「坐漁荘」邸内や日本庭園など印象深かった。この間、山あり谷あり坂ありで、中食をはさむ延々五時間余。桜の蕾いまだ硬い頃とはいえ全員やや汗ばみつつ足を棒にしての談笑懐旧の散策



漫歩、快適の極みのうち2時過ぎ散会。次回は金沢地区の諸君が幹事となり10月下旬開催の予定。

当日の参集者。関東⇨伊藤素衛、浦井忠雄、大沢錠二、斎藤季夫、田畑喜作、土屋博靖（季道）、釣谷武村上（中川）四郎、西川宗保、西出次郎。北陸⇨大弥久幸、太田兵吉、笹井（額谷）富雄、中田孝治、本保斉弘、和泉三郎、島知一。関西⇨耕納喜三太、田中（高柳）重雄、村本進午、林屋清次郎。中部⇨上原誠

（斎藤季夫記）

### ◇一中41期全国大会関東大会

金沢を中心として開催していた従来の全国大会とはガラリと趣向を変えて、今回は杉田君等関東在住同期生の肝入りで、左の如く関東大会を開いた。



日時 五十五年十月二十五日（土）  
場所 伊東温泉 龍石（一泊）  
会する者、北陸地区から十九名、関西、中国、中京地区六名、関東地区十五名の合計四十名。卒業以来四十六年振りに顔を合せる者もあり、宴に引続き各自の部屋で夜の更けるまで、しみじみとした歓談が絶えなかった。翌朝同期生会今後の運営方法に就いて協議をした後、マイクロバスで近くのユニークな池田美術館を見学、更に十国峠で素晴らしい富士山の姿に驚嘆しつつ三時過ぎ小田原駅で、次の大会での再会を約し、東や西にと別れを告げた。

（牧沢記）

### ◇十桜会（一中42回）全国大会

第42回（一中昭和10年卒）全国同窓会は約40名の参加者により、55年10月9、十日両日に亘り三重県湯の山温泉「寿亭」で恩師斎藤大六先生及び会員の夫人方をお迎えして盛大に催されました。



同期は「十桜会」の名称で毎年石川、関西、関東の三地区持ち廻りで総会を開いて居り、来年の十月は既に熱海の「起雲閣」と決っています。同窓生の消息をそのままオフセット又はコピーして通信集を毎年全員に配布しているが、来年は入学50年目を記念して、大々的に記念会誌を刊行することも決定されています。現在消息を完全に把握されている百十名と恩師並びに物故会員の御遺族の方々よりも寄稿を戴くことになっているので、一泉同窓会の皆様の御力添えをも期待しています。（古沢記）

◇一中46期報  
オープン「金沢国際ホテル」で  
クラス会

期友の内田一君がオーナーの金沢国際ホテルがこのたび金沢「高尾城史跡」にオープンしたが、四十六回卒業生一同これを祝って、有志クラス会を同所で開催した。

当日の出席者三十八名。遠く東京方面や、富山よりも期友はせまじ、クラスメート内田君の人生第二の大事業に幸あれと心をこめて乾杯した。東京の村井又兵衛、金沢の石野竜山、青梅洪治、太田定夫、寺内良雄各君より連絡や激励の言葉があり、自然につつまれた金沢の新しいコミュニティの場として同ホテルの発展を期友一同心から祈った次第である。

尚、同ホテルの披露パーティには、中西知事、江川市長、宮金沢商工会議所会頭（51回）、米谷北国銀行頭取（50回）などの出席祝辞があり、森、島崎国会議員も出席され、約五百名の出席者で会場は溢れるばかり。参列者一同、特長を各所にもった近代的国際ホテルの素晴らしさに感嘆の声をなつたものである。

（太田 記）

◇第47期（昭和15年卒）40周年記念  
同窓会盛大に開催さる

昭和55年9月14日午後、母校厳霜碑前に今は亡き同窓生47名の霊を慰めるため出席同期生全員菊花を献花し、慰霊祭を執行した。その後、母校教頭の同期生垣田君の案内で改築直前の校内を巡視し、40数年前に移築した真新しい新校舎の姿を思いおこし感無量のものがあった。



ひき続きスカイホテル18階トップ・オブ・カナザワで40周年記念同窓会を開催した。

関東、関西からは夫人同伴、母同伴の出席者もあり、上田先生、後藤

先生を中心に、かつてない盛大な同窓会となり、65名の出席者は、40年前の若き日に帰り、声高らかに一中校歌、応援団歌を合唱した。本当に40年ぶりに逢えた学友の姿は、戦争から平和へ、そして経済大国の一翼をになつた者たちの40年の歴史の話は尽きないようであり、秋の夜長の同窓会はパッと花が咲いたようであった。（大蔵 記）

◇金沢一中53期秋の大会

金沢一中第53期生の本年度秋期同窓会が同期の織田広君の世話に依り去る九月二十七、八日の両日に亘り山中グランドホテルにて開催された。集つた同期生は三十名。久々に顔を合わせるこの同窓会は往時の中学生にかえつた気持ちとなり、終始なごやかな歓談の裡に進められた。尚、今年からは順次、同期生による卓話を行うこととし、夫々その専門のテーマで持ち廻ることとした。

講師は次の通り

- 石川 弘氏 日本の食料事情について
- 四位例 章氏 五十歳の健康管理
- 堀 比呂志氏 電力事情について
- 永井 浩氏 日本の交通

◇一中56期・泉丘2期生の大坂大会  
大阪在住の一中56期・泉2期の同窓会を去る十月二十六日料亭「豆狸」に於て開催した。

当日は都合にて十四名の欠席者があつたが、遠く金沢より普神・鰐の二氏と東京より中村氏の参加を得、目下売り出し中のスキー、スポーツウェア・デサント社長織田氏を始めとして二十三名の盛会をみせた。とくに当日は大坂・八尾市在住の恩師長井先生を招待し、夜の更けるのを忘れ歓談した。（蜷川 記）

当日の参加者

- 織田 潔 亀田 一広 北村正夫
- 犀川 久 新矢陸夫 田口裕子
- 津田 肇 塚本靖彦 坪野正文
- 竹田静司 蜷川俊則 松波郁代
- 山崎順正 北川時男 田尻満穂
- 谷本慎吾 友栄 享 村上了太
- 山田武司 鰐 弘子 普神貴行
- 中村外喜子 長井金二



# はじめて開く関西八泉会

山本 他計志

泉丘三十一年度（泉八回）卒業の関西地区在住者四十七名で、名称を「関西八泉会」と名づけて同窓会を結成。今後これを発展させてゆくべく去る二月十五日、大阪城を眼下に展望する大阪O M Mビル20階の「東天紅」を会場として盛会のうちに発足した。

司会を矢原靖司君がつとめ、卒業後二十五年振りに合わず顔は、最初は名前と顔が一致せず互に話をかわす中にそこは同期生同志のこと、時間を経るにつれ共に童心にかえり、再会の歓談は尽きることなく、又互に遠く郷里金沢の地を離れて関西に住む同期生ばかりであり、その心情は互に理解出来、有意義な同窓会となった。

(13)

今後この八泉会がいよいよ発展することを各自喜び合い、同窓会終了後も離れがたく二次会、三次会と大阪の街を右左右左賑やかにこの一日を楽しんだ。尚、幹事には山本と藤井幾久子君（旧姓多々）を選出し、次回の八泉会は十月頃、会場を京都嵐山として再会することを全員一致で決議した。

末文になりましたが、この会の発



足の因となった泉八期生の名簿完成の重任にあたられた金沢の福田太雄君等に対し、関西八泉会全員が感謝の意を表します。

### ◇一泉管和会同窓会

石川県管工事組合に所属する旧金沢一中現泉丘高校出身者にて組織する一泉管和会同窓会では、本年度大会を昨年十月四日国鉄共済会「犀川荘」で開催した。会則の第一条に明記してある『本会は旧金沢一中、現泉丘高校卒業生で管工事事業に従事している者が仕事を離れて和やかに集う会とする』の趣旨にのっとり、親



善麻雀大会を行い、つづいて午後六時より懇親会に移る。まず平素の仕事を離れてと大垣秀邦会長の挨拶が始まり八野宏昭幹事の司会で宴会が進み、和やかな談笑の裡に再会を約して散会す。

## 郷土を知る

飯倉 亨  
(泉丘十三回卒)



今の大学入試が詰め込みだの、公平な選抜でないのと色々な意見があ

るが、私の場合20年過ぎた今、受験勉強できたことに感謝している。歴史の本を読むときに受験の為日本史の教科書を何度も読み返した、そのことが歴史を体系的なものにとらえ理解に役立っている。

10年前東京より金沢にUターンしてきたが、郷里に戻って急に郷土のことが知りたくなり色々な人のお話を聞いたりしてきた。

一中の先輩には郷土史関係に精通した人が多く、昨年亡くなられた大鋸彦太郎さんもその一人である。大鋸さんが戦前から集めた郷土関係の資料は今、県の郷土資料館で整理しているが何しろトラック三台分あったという。

郷土史家というとか近寄りた

い気がするが案外身近な存在である

と思う。その土地に生まれ育った者

は他県の転入者、旅行客からみれば

郷土史家であり又人生経験を重ねて

いくと誰もが古老になり書物に書いて

いないことを知るようになり、す

なわち郷土史家となる。

泉丘高校は創立90周年を迎えるが、

明治・大正・昭和と時代と共に大きく

歩んできた。数多くの卒業生が各々が

信ずる道で活躍している。時代がどう

変わろうとその時代に生きていく。真

実はただ一つ、そのかくされているもの

を世代から世代へ、先輩から後輩へと

伝えていきたいものだ。

# 同窓会通信

## 第8回桜美展開く

伸びやかに競う……絵の同窓会。

年ごとに好評を得ている桜美会美術展が今年も「大和文化ホール」を会場として十月九日より十四日迄盛會に開催された。この一年間、会員の努力の作品百数十点が展示された。

名誉会員、特別会員の鏑木勢岐、井口政雄、原田太乙、黒田桜の園、杉村ト貝の各氏の他、西出大三、堀義雄、隅谷正峯、中村秀雄氏等の作品



才 8 回 桜美会美術展 S55.10.9-14 於 大和F8

が出品され、会場は連日大好評を受けた。とくに一泉同窓会の会員が次

々と来場し、旧師宮沢外与治先生を中心に和やかな談笑が毎日続いて小さまざまな同窓会風景がみられた。

(桜美会事務局 斉藤弥吉)

## 「木アレイ」で、明治の体操復活

母校泉丘高校で昨年十一月金沢で開かれた第13回石川県創作ダンス発表会で明治、大正期の金沢一中等で広く普及していた木アレイ(啞鈴)を使う「啞鈴体操」と「アンビール・コーラス演習」を披露した。同校生が演じた木アレイ運動は他校が新



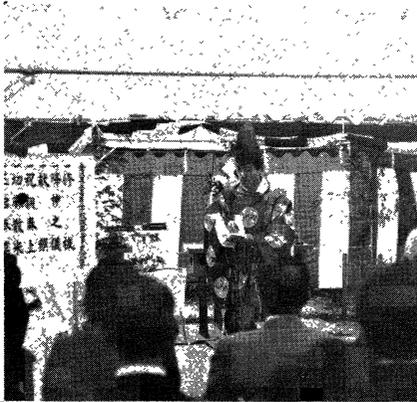
しいスタイルの現代的なダンスを発表した同大会では異彩を放った。

今回使用された木アレイは約百年前のもので、明治、大正期の金沢一中で体操用具として用いられた。同時代の卒業生には懐かしいものである。一個の重さは三百グラム。泉丘高校の体育教諭が倉庫の片すみに眠っていた木アレイを見つけ、明治時代の資料にもつき当時の体操を再

現したものである。この体操を指導した野村教諭は「木アレイ運動は学校体育の歴史上非常に貴重な体操で今後の参考になれば」と思い発表しました」と話している。

## 校舎改築58年度完成へ起工式

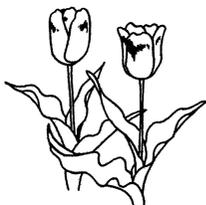
泉丘高校の改築工事計画も決定し、十月二十九日秋雨の降る中に起工式を挙行了。当日は中西県知事をはじめ矢田県議、同窓会、PTAの役員、大高校長以下職員関係者が集り、神明宮の官司の司祭の許に厳しゅうに行われた。現在一部取壊し作業と共に第一期工事の特別教室棟の建設中である。新校舎は鉄筋五階建て延べ一万七千平方メートルで現校舎の二倍強昭和五十八年度完成を目指して建設予定。



## 人間国宝に隅谷正峰氏

国の文化財保護審議会が去る四月三日、優れた芸能、工芸技術を重要無形文化財に指定し、その技術の保持者を「人間国宝」に認定する答申を行った。その中に日本刀の刀匠、松任市在住の隅谷正峰氏が加えられた。石川県では、人間国宝は八人目という栄ある認定で、生存者で県内に在住は隅谷氏ただ一人である。

隅谷氏は昭和十三年、一中第四十五回の卒業で、鎌倉期の備前伝の伝承に努め、もともと気鋭の刀匠として知られており、刀剣界最高の栄誉とも言うべき「正宗賞」を三度も受賞している。



### 同窓先輩よりの著書寄贈

昨年に引き続き、先輩各位から、その著書の寄贈が同窓会本部に相つぎ、そのご厚意に深く感謝している。これ等の貴重な本は広く同窓、後輩に公開し、将来にそなえることとしたい。

寄贈をいただいた方々は次の通り。

○栗田添星氏（大正十三年卒）

茶室考（村松書館発行）

酒井宗雅茶会記（村松書館発行）

○片瀬貴文氏（昭和二十三年卒）

新幹線の計画と設計（山海堂発行）

○堀 義雄氏（昭和十年卒）

子どもの造る彫刻（明治図書出版）

○田川米男氏（昭和五年卒）

琵琶随想（北国出版社）

○浦 茂氏（昭和二年卒）

読賣ニュース

○那谷敏郎氏（昭和十五年卒）

平凡社カラー新書「聖域行シリーズ

- ・ピザンチンの光芒・ネパールの生神様・スリランカの三宝・トルコの施舞教団・イスタンブールの案内・インドの黄金寺院

### 石川県庁一泉同窓会の名簿が完成

かねてから整備を望まれていた石川県庁の一泉同窓会の名簿がこの程立派に出来上った。

特別会員として矢田富雄県議（一中36回）以下六名の県会議員を加え、旧一中出身者三十八名、一高出身者一八名、泉丘出身者二六二名、泉丘通信出身者七名、計三三一名の会員となった。

今後、この会員で県庁一泉同窓会の団結をかため、発展を期することとなった。

### 各期同窓会開催について

最近、各卒業期ごとに催す同窓会がとくに頻繁に行われ、同期ごとの親睦を深めている。又、職場を中心として一泉会結成も近次目立つて増えてきました。これ等同窓会開催の様子は是非当本部宛にお報らせいただき、この機関誌一泉に掲載し、広く皆様に報道したいと思います。皆様のこの団結がいよいよ一泉同窓会の基盤を結束することになり、今後の発展に期待できることを考えます。是非ご一報下さることを願います。

### 「男と女・愛と死」



五十五年二紀展出品作

堀 義雄  
(一中四十二回卒)

### ◇松任一泉同窓会結成される

松任市在住者か市内に勤務する金沢一中、泉丘高校を卒業した人で組織する松任一泉同窓会結成総会は、十六日午後六時から同市民文化会館で約百人が集まって開かれた。会則などを決めた後、新しい役員を選任、最後に懇親会を開き、お互いの親善を深め合った。

役員は次の皆さん。

- ▽会長 林繁夫▽副会長 金谷与平、木村源治、本家京子▽幹事 室賀喬、藤原弘、大谷涉、金森義、小川潔、福住孝、錦谷輝子、油省三、山田健夫、宮村栄一▽事務局 青木桂生、倉田栄、平野悦雅▽監事 板尾達雄、春秋賛▽顧問 米永東吾、結城与久、大岸嘉次郎、本保斉弘、三須外男

### 「さよなら/金沢一中、泉丘校舎」の写真販売

昨秋から、校舎の一部取壊し作業が始まり、その後の工事の進歩から五階建の新校舎の一部が既に出現しました。旧校舎も今やその半分を残すのみとなり、同窓会では、この旧の想い出を語る校舎全景の航空写真を撮り、皆様に頒布することに致しました。同写真は、旧本校正面と校舎全景の航空写真二枚の三枚（キャビネ版）一組とし、金一、〇〇〇円とし、各期で取りまとめお申し込み下さい。

尚、送附ご希望の方は送料共同封の上、直接お申し込み下さい。



さよなら  
石川県立金沢一中、泉丘校舎

